

Kritische Essays zur europäischen Literatur

ヨーロッパ文学評論集

E. R. クルツィウス

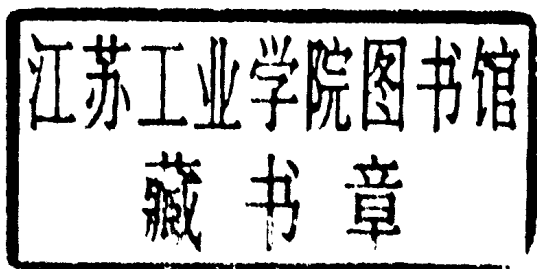
川村二郎・小竹澄栄・高本研一
松浦憲作・圓子修平
共訳

みすず書房

ヨーロッパ文学評論集

E. R. クルツイウス

川村二郎 小竹澄栄 高本研一
松浦憲作 園子修平
共訳



みすず書房

E. R. クルツィウス
ヨーロッパ文学評論集

川村二郎 小竹澄栄 高本研一
松浦憲作 圓子修平
共 訳

1991 年 6 月 18 日 印刷
1991 年 6 月 28 日 発行

発行者 小熊勇次
発行所 株式会社みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15
電話 3814-0131(営業) 3815-9181(本社) 振替 東京 0-195132
本文印刷所 精興社
扉・表紙・カバー印刷所 栗田印刷
製本所 鈴木製本所

© 1991 in Japan by Misuzu Shobo
Printed in Japan
ISBN 4-622-04686-5
落丁・乱丁本はお取替いたします

目次

	初版への序文	
	第二版への序文	
1	ウエルギリウス	1
2	ルードルフ・ボルヒャルト、ウエルギリウスをめぐって	5
3	批評家としてのゲーテ	6
4	ゲーテの書類作り	18
5	ゲーテ——その世界の根本特徴	26
6	フリードリヒ・シュレーゲルとフランス	48
7	シュテファン・ゲオルゲ、語らいの中で	61
8	ホーフマンスタールを偲んで	77
(a)	ホーフマンスタールのドイツ的使命	90
(b)	ホーフマンスタールとロマン文化	108

21	20	19		18	17	16		15	14	13	12	11	10	9
フランス小説に関する覚え書	ホルヘ・ギリエン	トインビーの歴史学	II 一九四九	I 一九二七	T・S・エリオット	ラモン・ペレス・デ・アヤーラ	II 一九四九	I 一九二四	オルテガ・イ・ガセツト	シャルル・デュ・ボス	ウナムーノ	バルザックとの再会	ヘルマン・ヘッセ	ゲオルゲ、ホーフマンスタール、カルデロン
358	352	330	304	291	266	259	246	232	208	190	175	156	140	119

24	23	22
補遺	ウイリアム・ゴーイエン	若きコクトー
解説（一九六九年）	アルゴナウテンの船	
訳者あとがき		

初版への序文

私の最初の仕事はフランス文学を対象としていた。およそ詩作品でありうるものを学ぶなら、古代や、スペインや、イギリス、ドイツに眼を向ける方がよい。だが、文学なるものを学ぶとなると、フランスでなくては駄目だ。もっとも本書には、フランス文学は僅かしか取りあげられていない。フランス文学に関する著書や分散した論文は、また別の機会にお目にかけたと思う。

ドイツ人で、しかも私のようにアルザスで生れ育った人間にとって、フランスは必要不可欠な半身であった。と同時に、ある種の緊張でもあって、アルザスほどこの緊張を強く感じとれるところはどこにもなかったのだ。アルザスの同世代の友人、エルンスト・シュタードラーとルネ・シクルの詩が、その好い例である。この緊張の中では、同時にヨーロッパが体験された。ベルリンやミュンヘンにおけるよりもは

るかに切実に。今日シュトラースブルクでヨーロッパ連合についての討議が行われていることは、歴史的に充分意味がある。もっとも私には、ドイツとフランスというヨーロッパだけでは、それほど充分とも思えなかった。私はバリより先にロンドンを訪れた。イギリスには、フランスでは見つけられない恵みがあった。イギリスと、そして私が何十年も後によりやく足を踏み入れることとなった、エマソンやホイットマンのニューイングランドには。若い頃、イギリスとフランスにイタリアが加わった——芸術と風景の栄光によって魂に深い感銘を刻み込みながら（イタリアの近代文学からはほとんど何も得られなかったけれど）。ローマは西洋の母であった。《平和なるドイツ人 (Teutones in pace)》は、サン＝ピエトロ寺院のそばの共同墓地を見降ろして立っていた——私のために私なりに翻訳できたひとことといえば。私の研究——その発展経過については補遺で触れているとおりである——と旅とが、その後私をスペインへ導いた。マドリッドからはヨーロッパを横切って、ハブスブルク家のウィーンへ、一本の絆が走っていた。以前から私には至宝を意味していたホーフマンスタイルも、この絆に結ばれていた。こうして私のヨーロッパは、ますます広大に、ますます豊かになっていった。だがヨーロッパの子らは、古代ローマの辺境内にあったドイツをも含めて、みなローマの痕跡を刻み込まれていた。ヨーロッパ

ッパ文学に遺されたローマの遺産を、私は『ヨーロッパ文学とラテン中世』（ベルン、フランク社、一九四八年、第二版一九五四年）に示そうと試みた。この本は、何人かの批評家の考えたように、私の《現代研究の段階》もしくはフランスへの愛に対する絶縁を意味するものではない。私の心を占めていたのは、いつも同じひとつことであった。つまり、ヨーロッパという意識と西洋の伝統。しかし歳月を重ねるにつれ、私は時間と空間双方に、もっと深く掘り進み、さらに広く手を伸ばす必要を感じたのだった。私には、持続性の方が目下の現実より重要となった。つまりゲーテ死後の近代人よりも、ウエルギリウスやダンテの方が意義深く思われるようになったのである。

今示唆したところすべてに関して、本書でも何かしら気づかれる点があることだろう。

*

本書の各論の配列は、全体として、作家の年代順に従っている。各論はどれもそれぞれの方法で、文学批評の課題を推し進めようと試みている。だがこれらは四半世紀以上の長きにわたって書き継がれてきたものだ。このように長い年月の経つ内には、批評者の観点も評価も変化する。サント・ブーヴは一八五〇年に、『月曜閑談』の第一巻への序文で次のよう

に述べている。「私が文筆活動を開始してからすでに二十五年が経過しているが、これが、私の過してきたさまざまな時代と環境に従って、私の印象と文学的見解に与えることとなった第三の形である。」第一段階（一八二四―三〇）には、批評は論争を挑み攻撃的であった。第二段階（一八三〇―四八）では、「分析的で、叙述的で、好奇心に唆られて」いた。こう語ったあとで、彼は次のように続けている。この第二段階には、たったひとつだけ誤りがあった。つまり「結論を出さなかった」こと。彼は決定的価値判断を回避していた。いや、回避したと信じていた。一八四九年十月に彼が批評活動を再開したときには、ブルジョワ革命も社会主義革命も鎮圧されていた。政治家どもの狼狽をよそに、一八四八年十二月十日、ルイ・ナポレオンが国民投票で共和国大統領に選ばれた。反動が革命に勝利し、まもなく共和国にとどめを刺すことになる。サント・ブーヴが用心深く《最近の経験》と婉曲に表現しているこの急激な政変のおかげで、彼は自分の批評の第三段階のために、次のような結論を引き出すことになった。「時代相がますます苛酷になり、街の動乱と騒擾が各人に無理やり大声を張り上げさせ、同時に最近の経験が各人の精神に善悪の感覚を一段と取り戻させるにつれて、ますます果敢に、ただし礼節は欠かさずに、作品と作家について真実と思われたことを、ついにはつきり語ることができるようになったと、

私は考えたのである。」サント・ブーヴは独裁政權に自分を売り込もうと思ったのだろうか？ それとも、評価的な批評へ向かおうとする自己の内面的変化に何か意味深い背景を付け加えたくて、こんな抛りどころを持ち出したにすぎないのだろうか？

一九一九年から一九三一年にかけての私の批評の仕事も、《分析的で、叙述的で、好奇心に唆られていた》といつてよいだろう。ただし私の場合、その原動力は、愛好者の好奇心というよりは発見者の熱情にあった。私は外国の作家について書いた。彼らはドイツでは知られていなかった。読者にはじめて紹介しなくてはならなかった。だから叙述と分析が不可欠だった。もちろん評価も存在した。評価は作家を《選出すこと》に置かれていた。ほんの僅かな人々しか選び出せるはずもなかった。生きている人々の内でも最高の精神しか私の心を惹かなかつたから。私はジャーナリストイックな批評家だったことは一度もない。文学市場の相場変動には少しも注意を払わなかつたし、少なからぬ同時代の有名作家のことを見かけ倒しと考へていた。しかし私は、自分が恵まれていると思はずにはいられなかつた。というのも、ヨーロッパ文学のひとつの偉大な時代と、体験を共有し合っていたからだ。ジッド、クロードル、ペギー、ブルースト、ヴァレリー、ホーフマンスタール、オルテガ、ジョイス、エリオット（は

んの少々名を挙げてみただけでも）のような偉大な人々と共に生き、しかも彼らの解釈者であるということ——それは、そう簡単には二度と訪れない、そしてこれまでも実際二度とはあつたためしのない幸運なのだと、私は考へていた。一九三〇年から一九五〇年にかけての二十年間には——全体を見渡せば自ずと理解できるように——この一九一〇年から一九三〇年までの二十年間に比肩できるような価値はひとつもない。「……パロ夢ることあり。即ち河の濱にたちて視るに、七の美しき肥たる牝牛、河よりのぼりて草を食ふ。その後また七の醜き瘦たる牛、河よりのぼり河の畔にて彼牛の側に立ちしが、その醜き瘦たる牛、かの美しき肥たる牛を食ひつくせり……」（『創世記』第四十）。もちろん私は、今日、多くの肥えた牛が草地で草を食んでいることを知っている——そしてそのことを私の学生たちのおかげで肝に銘じさせられている事実、私は期待して見張りすらしているのだ。だから何ひとつ断念しないでいたきたい。

とはいえ、六十歳ともなると、四十歳の頃とは異なつた観点や関心や欲びや欲望も出てくるものだ。重心の置き方も移り変る。近いところが視えづらくなり、その分遠くが視えてくる。現在という前景を越えて、地平線を遮断している彼方の山々の方へ、眼ざしを向けるようになる。今日では、一九三九年以前に存在していた一切が、すでに歴史の彼方に遠ざ

かってしまったように思われる。だが私はこの彼方の懷に帰りたい。本書には、同じ作家について複数の論文が収められている（オルテガ、エリオット）。これらは二十年以上の歳月を隔てて書かれたものだ。その論調は異なっている。あとから書いた論文の方が、対象に距離を置いている。どうして別の方法になるのだろうか？ サント・ブーヴが彼の以前の段階の《欠陥》として批判しているところ、つまり《結論》を出さなかったこと——これは批判的若さの特権である。それと同じように、測り直し慎重に吟味することは、後の段階の権利であり義務なのである。批評家のこのような変化の実体を覗き見ることを、読者の方々が歓迎してくださるようお願いものである。

*

最古のものを誠実に護るのは、

暖かく受けとめられた新しきもの

この言葉の意味するところを、皆さんは本書に御覧になるだろう。もしマックス・リーヒナーのたつての要請がなかったら、私はウエルギリウスについては決して書かなかったろう。彼の主宰で「新・スイス・展望」誌は、ヨーロッパでもほとんど五指に入るといえる最高の雑誌となった（一九二七年

のエリオット論も、この雑誌に発表した）。今だったら、一九三〇年とはまた別のウエルギリウス論を書くことだろう。ところがこの論文は、専門家の賛同を得てしまった。となると、最も偉大なるラテン詩人へ捧げる敬意の印として、ここにこの論文を載せても差し支えあるまい。古代と同時に、現代を論ずることは、レッシング、シュレーゲル兄弟、サント・ブーヴ、ペイターには当り前のことだった。同じく今、ルードルフ・アレクサンダー・シュレーダーにとっても、それは自明のことである。この特権を放棄するような批評に対しては、セイントペリの次のような命題を突きつけて然るべきである。「現代なき古代は蹉きの石である。古代なき現代は、完璧な取り返しのつかぬ愚行である。」

最後の一篇は、神話から引いた一例を題材にして、ヨーロッパの文学伝統の持続性を証明しようと試みている。それは私の中世研究の続きである。文学史と批評は別物である。だが、両者は同じひとつ家に住まうことができるし、互いに多くを与え合わねばならない。批評の訓練を積まなかったら、私は中世の書を著わせなかったろう。そして歴史的研究の訓練が、私の批評に役立っていることを望みたい。

ボン、一九五〇年、復活祭

第二版への序文

新しい版は大幅に増補した。増補の一部は一九三三年来紛失していた著作（『ジェイムズ・ジョイスと彼の『ユリシイズ』』）であり、残りは最近書いたもの——ボルヒャルト、シヤルル・デュ・ボス、ホルヘ・ギリエン、アメリカの若手作家ウィリアム・ゴッリエンに関する仕事のような——を拾い上げた。

ボン、一九五四年、聖霊降臨祭

〔小竹澄栄訳〕

1 ウェルギリウス

かく神々に奉仕しつつ、汝の子孫は清浄を保つをえん。
『アエネーイス』、三ノ四〇九

ウェルギリウス（紀元前七〇の後^九。古代ローマ最大の詩人。作品は『牧歌』、『農耕歌』、『アエネーイス』）の墓と最初の皇帝（アウグス^{トウグス}）の墓は、イタリアの民多き都市の壁とモルタルの下に横たわり、今日の私達の生活の騒音に取り囲まれている。ウェルギリウスは、年代記の上で誕生日にいたるまで知ることができる。その二千周年（一九三〇年）を私達が祝うことができるということは、ローマに縁のある者すべてを敬虔な幸福の戦き^{おの}で満たさずにはおかない。これは学問の上での回想ではなく、生きた記念日であり、敬虔な行事である。

しばしば私達今日の気忙しい種族は、そのテンポのために時間を、現実性を求めるために過去を失ったかの観がある。私達は遠く離れた空間へとさまよい出るが、そのかわりに私達の時間の感覚が見苦しく下品に狭まり、あるいは幻想的に実質もなく拡大するのを甘受しなければならない。そこで千

年のリズムで動くいろいろの記念日が私達に反省を促すことが望ましい。ダンテ没後六百年、アウグスティヌス没後千五百年、ウェルギリウス誕生二千年などがそれである。ゲーテ以来の百年はただ千年単位の日付の意義と価値を明らかにするのみである。

ウェルギリウスの記念日は一般的ではなく、それゆえに二重に重要である。正しく理解されれば、それは、西欧の自己反省のたいなる神秘に満ちた過程において、また、たんに私達の最高の精神の夢、私達の最善の人々の言い表わし難い言葉として生まれようとしたにすぎないとしてもなお記念さるべきものである出来事——ホーフマンスタールのような深い予感をもち、長期にわたって思案を凝らす精神の特主の思い描いたような西欧の融合と復活——の生成の黎明において一時期を画することができる。

ウェルギリウスの記念祭がこのような関連をもち、このような反響を呼び起こすこと、あるいは呼び起こしうることは、すでにこの記念祭の主となる名前の比すべきもののない獨自性が、それだけで示しているところである。そしてまた、この獨自性はなんと無尽蔵であることか！ 私達は第四の牧歌がそれを作った詩人にとってなにを意味したかを究明することはあるまい。この牧歌は、かの『雅歌』として私達の聖書に入った東方の愛と神秘の書と同じく、言い表わし難い内容

という神秘的な特権をもっている。それにもかかわらず、私達は中世の伝説(この牧歌がイエスを予言したものだという説)を私達なりに確認してもさしつかえない。神人の啓示とローマ帝国の詩人が時代を同じくしたことのうちにヨーロッパの神秘が隠されており、これが再発見されうるのだと信じてもしつかえないのである。私達はダンテによるその神聖な保証をもっている。そしてウェルギリウスとダンテが、偉大なローマの異教徒 (paganus)、牧場と牧人の歌い手が、偉大なローマのキリスト教徒、彼岸の遍歴者かつ此岸の監督者と分かち難く結びついていることは、私達の歴史の吉兆の一つである。

意識しているにせよ、いないにせよ、独創的な天才という古くさい芸術論に固執する者は、ウェルギリウスを絶対に理解しえないであろう。ウェルギリウスの偉大さと重要性、私達のすべての時代を通じての彼の何人にも代え難く、また代わる者のなかった使命は、彼が一個人としてなんであったかということに基づいているのではない。あるいは少なくともそれだけに基づいているのではない。それは「時満ちた瞬間」が個々の人間に何を与えうるかを知っている場合にのみ明らかとなる。ウェルギリウスが千三百年後に他ならぬダンテによって取り上げられ、高められたこと、彼の言葉が十四世紀のフィレンツェ人(ダンテ)によって答えられたこと、またそれが時間のなかでのローマの崩壊の際にその最後の詩人によ

って承認されたことは、ウェルギリウスの偉大さの定義、その本質自体に属する。⁽¹⁾これを評価するためには、すべての近代の尺度を放棄して長い時期を単位として計算する練習をしなければならぬ。それは私達にとってはなじみのない道である。おそらくそのために、有益で必要なのではあるまいか。二千年存続したものは、これから先の数千年も存続するであろう。少なくともそのことを私達ははっきり知ることができる。とすれば私達はこの認識によって私達の遠近法を訂正することを拒否すべきだろうか？

以前の諸時代にとっては「偉大な人々の例」は証明であった。私達にとってはそれは対決を意味する。そして伝統は曲り道して訂正を受ける。私達は伝統にまことに縁遠くなつたので、私達には伝統は新しい。このような時代はたぶんすべてのルネッサンス(再生)の黎明である。現在のドイツがウェルギリウスに疎遠であることは、こういうふうな準備と保証だと解釈し直すことができる。ロマン民族の文化に対するより深い理解が私達のあいだで目覚めつつあるらしい。そしてウェルギリウス以上の権威をもって、彼以上に的確に、力強く、そしておだやかに、豊かな声で甘美にこの文化を具現しているものがあろうか。彼はすべての詩人のうちで最も国家的な詩人であった。あたかもアウグストゥスが元老院首席制(事実上の帝政)の創設によってローマの永遠性を最高の現実の権

力に高めた時に、彼が詩人としてローマの永遠性を淵源から導き出す定めだったからである。ここには、世界的な規模においてローマの特性に属するリアリズムが、カエキリア・メテラ（小クラッススの妻。アッピア街道にあるその墓は、直径二〇メートルの巨大な建築）の墓やサン・ピエトロ寺院を築いている石灰灰華のごとく反論を許さぬほどに土着のもの、土地に基盤をもち土地と結びついたものが示されている。

黄金の古鏝をもつこの石灰灰華ほど時の侵食に抵抗する建築材料はほとんどない。その精神的な比喩がウエルギリウスの作品の建築材料である。マントウアの沼沢地に源を発し、その切石が一つの世界詩と一つの世界帝国を支えているラテン語の文章である。情熱的で諦念に満ちた永遠化への意志がこの物質を強固なものにした。ウエルギリウスの青年時代の詩の一つが修辞学への訣別を歌っていることは深い意味をもっている。私達の祖先はまだキケロのアッティカ風（洗練された）の散文を好んだが、軽やかな戯れと嘲けりの詩から始めて、他に例を見ないほどにますます厳しくますます壮大な課題に（いささかながらいやまざることどもをわれらは歌はむ）——

『牧歌』、四ノ一）みずからを純化した忍耐強い詩作家の前に、今日ではキケロの華麗な雄弁は影が薄い。『ウエルギリウス附録』（ウエルギリウスの若い頃の作と称せられる一連の詩の総称）にどれだけ異論があるにせよ、ともかくウエルギリウスの詩と魂の発端が魂と感覚の戯

れに近いこと、そして、これが牧神的なものと感傷的なものを私達にはほとんど思いもおよばぬやり方で結びつけていることは、確かである。どのような生涯の転機が、このカトゥルスの模倣者、ブリアーブスの詩（生殯神の名から機智に富んではいゝるが猥褻な短い詩の形式をいう）の作者をオルベウス教の「予言者」、国家意志の桂冠詩人たる奉仕者、世界の転換の予言者にまで高めたかを私達が知る時はあるまい。それは諦念であつたろうか。秘儀伝授であつたろうか。同時にそのいずれでもあり、キリスト教以前の聖列加入の原型だったのだらうか。私達は、これらの問題をこの詩人みずからが欲し、かつ愛した黄昏の光のうちに残しておかなければならない。

それはヴィクトル・ユーゴーが後継者として、また芸術家としての親近性のうちに敬意を表しながらウエルギリウスに認めるあのしばしば奇妙に輝きを放つ黄昏の光である。

……時折ウエルギリウスのなかで

詩句が奇妙な光をその絶頂で発する、

いわばトロイアの最も暗い夜にアスカニウスの頭上で希望に満ちて輝いたあの神聖な光の現象の反映である。

こういうふうにはローマとローマ領のすべての時代を通じて、ローマの秩序の意志となお接触のあるすべての歴史的な空間を通じて、ウエルギリウスの静かな焰が保証と約束として輝

いている。というのは、すべての変転を通じて永続するものを保持するのがウェルギリウスの底力であり、根本意志だからである。再現としての反復、再発見としての発見、所有せるものの確証と向上としての革新、これがウェルギリウスの心底からの関心事であった。

それゆえに「デイドー」(「アエネーアスが愛し、見捨て、るカルタゴの女王自殺する」)は『アエネーアス』、四ノ三二七以下で)アエネーアスに似た子供を望むのである。

せめて顔なりとそなたの代りとなる幼いアエネーアスがわが庭のあたりにて戯れてくれるならば、

それゆえに同一性(『牧歌』、一ノ五一、「なじみの河」と安定性、そしてそれが欠けているための(なぜなら社会学的な苦境および強制としての流浪は牧人メリボエウスの、そしてまたアエネーアスの運命である)革新と再生、再現でありまた同時に復旧であるもの、これがウェルギリウスの牧人や英雄や支配者の生の法則である。失われ、過ぎ去ったものを見知らぬ土地で、新しい材料によって築き上げることがウェルギリウスの英知の意志でありかつその道である。

私達の通俗美学にはまことに理解し難いウェルギリウスの芸術の特質——大いに論議された「模倣」——は、たぶん私達が彼の個人的な特性と感ずることを許されるこの心の状態

にも根源を発している。それは悲観的な憂愁と憧憬から生まれた安定への欲求であり、それが敬虔さによって高貴となり、崇高な歴史的関連によって建設意欲に変えられるのである。

しかしあの個人的なものは、超個人的なもの、すなわち連統性のローマにおける機能と結びついている。たぶんすべての新たに創られたものがその証明を古くから伝わったものから得て、これを示さなければならぬという、古代全体に通用する生活の法則とさえおそらく結びついている。植民地は母胎となった都市を、規則は制定者を、歌はミューズの女神達を、模写は本物を、芸術の営みは模範を示さなければならぬのである。

ウェルギリウスがアウグストゥスに会わなかったならばどうなっていたか私達には想像もつかない。しかし、『アエネーアス』の詩人とならなかったであろうことは確かである。皇帝との個人的な接触が彼をローマの歌い手とした。

かくしてローマはこの世の最も美^{うつく}しきものとはなりぬ。

(『農耕歌』、二ノ五三四)

しかし彼をたんに国家の詩人として、あるいは第一に国家の詩人として見るならば、ウェルギリウスを理解できないだろう。国家の詩人の下には、より深い層のなかに、「ローマの国事にも、滅び行く国家にも」(『農耕歌』、二ノ四九八)心を動

かされない瞑想的な芸術を愛する人間が生きているのである。彼は自分がたんなる歴史的、政治的な領域からは離れているのを知っている。この領域は本質的に不純で不吉であり、有為転変と神々の測り難い怒りにさらされている。

猛々しきユッピテルはすべてをアルゴスへ移せり。

『アエネーイス』、二ノ三二六―三二七

これまでわれらの力の源たりしすべての神々、祭壇と社を去りぬ。
『アエネーイス』、二ノ三五一―三五二

これらの詩句のなかで語っているのは、真正の古代的なまたロマン的な「転変」の歴史哲学である。それはダンテとヴィーコ（一六八―一七四。イタリアの哲学者。近代の歴史哲学の祖）のものでもある。それは諦念の契機を含んでいるが、たんに過渡期の弁証法的な一契機としてである。それは、歴史的なものの否定を要求することは少なく、かえって歴史の周期的な理解へと導くものである。第四の牧歌の予言、救世論的なウエルギリウスの、またダンテの希望、「原状回復」、黄金時代の更新の敬虔な期待は、「転落悪化」『農耕歌』、一ノ二〇〇）もまた真実とされる場合にのみ可能であり、また意味がある。私達の歴史的な現実主義、私達の貧弱な歴史的な現実感覚にとっては、また私達の終末論の宗教にとっても、体験のこの次元はもちろん失われてし

まった。ところが、ローマについてのウエルギリウスの二つの言葉、「滅ぶべき国」『農耕歌』、二ノ四九八）と「われ終りなき国を与へぬ」『アエネーイス』、一ノ二七九）のあいだの矛盾はこの次元からのみ解けるのである。ホラティウスの「ローマ歌章」の気風はアウグストゥス時代の国家的、倫理的体験が二人の代表的な詩人のうちに生んだ差異全体を感じさせる。ホラティウスと比較すれば、ウエルギリウスの独自性はいっそうはつきりするばかりである。

ウエルギリウスの最もひそかな憧れはまさに黄金時代であり、そして牧歌的な状態におけるその具体化である。⁽³⁾その内容は神々の恩寵によって与えられる至福の閑暇である。「閑暇」はウエルギリウスの文学の鍵となる言葉の一つである。

アウグストゥスの神がこの幸福を贈物とする。

おい、メリボエウスよ、神がわれらにこのくつろぎを作
り給うたのぢゃ。
『牧歌』、一ノ六

牧人達の神もそれを望む。

善きダブニスはくつろぎを好む。

『牧歌』、五ノ六一

それは田園生活の幸福である。

眠りは安らかで生活に偽りを知らず、
さまざまの宝に富めども農地に憩あり。

『農耕歌』、二ノ四六七―四六八

そしてこの地上の閑暇にならって、ウェルギリウスは極樂^{エリウム}の至福をも描く。フェヌロン^{フェヌロン}（一六五―一七五。フランスの作家でカンブレールの大司教、ルイ十四世の宮廷の教育者）がこの描写をキリスト教の天国の栄光と比較して次のように言うとき、私達は確かにもっともだと思ふ。「この詩人は、来世において、最も純粹で最も英雄的な美德に対して、草笛を吹いたり、砂上で鬨たり、踊ったり、歌を歌ったり、馬をもったり、戦車を御したり、武器をもったりする楽しみ以外にはいかなる報酬も約束しない……。これが最も慰めになるものとして古代が人類に約束したものである。」確かにダンテがはじめて、啓示の恩寵の充実のなから最も敬虔な異教主義にも到達しえなかった彼岸の幻想を創り出すことができたのである。しかし恩寵が自然を廃するのではなくて完成させるのだといわれるように、「閑暇」を合言葉とするウェルギリウスのあの心の領域全体においても、永遠の、恩寵の可能な人間性の一片を見ることが出来る。私の確信するところでは、常に新たな人間の世代をウェルギリウスに結びつけるあの不滅の魔法の多くは、この領域から出ているのである。私達すべてのうちに、近代の有能で貧乏たらしい業

績の倫理にもかかわらず、あの牧人の世界、地上の天国、神に祝福されたエデンと極樂^{エリウム}の園へのあの原始的な憧憬のいくらかが生きているのではないか。田園の牧歌はたんにヘレニズムの都市文化の理想像として説明し去ることはできない。それは私達の本性に生まれついている理想であり、私達がとくに消え失せたものと信じていた歌のように、憂いを帯びた幸福で私達を感動させるのである。それはキリスト教的、アジア的な神話の「甘美なる清涼」、小川や野原の快い涼しさであり、また「苔むす泉よ、そして眠りにも優りて柔らかき草の褥よ」^{レクノ}（『牧歌』、七ノ四五）である。「閑暇」はたんに古代の社会状態を基礎とする時代の制約を受けた無為を表わす言葉にすぎない。この無為が黄金の生活のあの形象に属しており、労働の強制を免れている場合にのみ、私達の使命を完全に予感しうることを私達に想い起こさせるものなのである。私達の労働の倫理には閑暇のような理想概念による均衡が欠けている。もしドイツ国民に彼らの最大の詩人をたんにたゆまぬ努力を奨める者としてしか認めようとならない教育的な図式から私達がみずからを解放すれば、『西東詩篇』（^{デゲル}詩集）からもちろんこの概念を引き出すことができよう。

『教養の詩人』ウェルギリウスは、実際には人間性のすべての自然な土台のために最も根源的で最も直接的な音をもち合わせている歌い手である。「閑暇」について述べたことは